

セッションNo.6 『ママ・パパIDOBATA 会議@ひろの～Let's 子育てトーク♪～』

開催日時：平成27年9月16日(水)10:00～12:00

場所：保健センター

コーディネーター：広野町復興企画課 塚野

グループファシリテーター：小樽商科大学インターン 峰尾、宮野、中田

参加者数 約50名（参加者（町内外）、海外招聘者、広野町放射線相談室）

概要

①グループディスカッション

3グループ（各グループ10人程度）に分かれ、ファシリテーター（小樽商科大学インターン生）を中心に現状、抱えている問題点について意見交換会

②グループ意見発表、意見の共有

今回のセッションでは10人程度のグループに分かれて、グループディスカッション（40分程度）を行った。今回参加した町民は帰還した母親が主であったため、各グループとも帰町した理由や帰町後の生活などが話の中心になっていた。確かに帰町をして、買い物や病院など物質的には不便だが、アパートや仮設で周囲に気を遣う避難生活よりも精神的に充たされていると感じ、のびのびしている子どもの顔をみると帰町して良かったと考えている参加者が多かった。

しかし、帰町はしたが、町内に子育て世代が集まる場がないとの話も多くあがっていた。震災前は公園に行けば、初対面でもその場でコミュニティが形成され、子育ての話を共有する場、子ども達同士の交流の場があった。しかし、現在では公園はあるものの利用者が少なくそのようなコミュニティは崩壊してしまっている。町内には子育て世代が集まる場、話せるカフェなどがいないため、参加者から悩みを話せる場が欲しいとの要望があった。

今回は帰町した専業主婦が主であったため、「働いていないと子どもを預ける場がない」など直接抱えている問題、生の声を聞くことができた。意見に偏りはあるものの、今後の復興には子育て環境の充実が不可欠である以上、子育て環境改善、子育て世代の雇用については重要な課題であると再認識した。

参加者より今回のようにみんなで話せる場が欲しいとの意見もあったことから、今後、子育て世代が悩みを相談、共有できる場が必要であり、そのような仕組みづくりを行政、地域全体で考えていくことが課題である。また、今回は学生、海外招聘者がグループに入ったことで質問に対して本音を引き出し易く、非常に良い機会、良い意見交換会となった。

本セッションでの主な意見は以下のとおり

○現状

- ・作業員、知らない人ばかりなので怖い。
- ・買い物、病院が不便（※買い物に関しては、震災前から不便であったことに変わりはない。震災後、避難中に便利な生活になれてしまっているためそのような意見が出ているのではないか。）
- ・広野では働く場がない。また、子どもがいるとフルタイムでは働けないため仕事がない。

○子育てについて

- ・作業員が多く、不安で子どもを外で遊ばせられない。
- ・外で遊ばせたいが、近所に同世代の子どもが少ない。
- ・子どもの習い事（塾、スイミングなど）のためにいわき市へ送り迎えをしなくてはならない
- ・働いていないと子どもを預ける場所がない。夏休み等、長期休みは子どもが他の子どもと接する機会がないため孤立してしまう。
- ・震災前は公園に行くとき他の人も集まり、話したり遊ばせたり出来ていたが、今は行っても誰もいない。震災前に遊んでいた上の子どもと兄弟間で差ができています。
- ・子どもが怪我をしてもいける病院がない
- ・仕事をしていけば預けられるが、仕事をしていない人はどこに預ければ良いのか。
（※震災後、事情によっては例外的に児童館で受け入れも行っている）

○帰還して良かったこと

- ・帰還して子どもがのびのびしている。特に顔つきが違う。
- 震災前は一軒家だったが、アパート、仮設に避難した。避難中ということもあり周囲に気遣って強制的に子どもを静かにさせたが、子どもにとってはストレスになっていた。
- ・生活は不便で物質的には満たされないが、精神的には満たされている。
 - ・転校させるなど心配はあるが、子どもは順応性がある。子どものためと言いながら、実は帰還しないのは親の問題なのではないか。

○帰還した理由

- ・帰還してからの先の不安より避難生活のストレスを考え戻ってきた。
- ・夫の仕事の都合、家がある
- ・子どもの就園、就学のタイミング

○要望

- ・大きな商業施設が欲しい。商業施設→人が集まる→人が定住する
- ・空き巣被害があった。安全の再確認をして欲しい。
- ・地域が見てくれるような教育施設が欲しい 例）老人会のおじいちゃん、おばあちゃん等